

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520428

研究課題名（和文） アイスランド語における相互表現の研究

研究課題名（英文） A study of reciprocal expressions in Modern Icelandic

研究代表者

入江 浩司（IRIE KOJI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40313621

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、現代アイスランド語の相互表現を包括的に扱った研究である。主要なトピックとして（1）語彙的相互動詞、（2）再帰代名詞による相互表現、（3）接尾辞-st をもつ相互動詞、（4）接頭辞 sam- をもつ相互動詞、（5）相互性を表す副詞相当句による表現、（6）相互代名詞による表現、を取り上げ、動詞を中心とした記述的研究を行なった。動詞が含まれる節内のどの要素の相互性が表されるかが、表現手段ないし動詞の意味により変異すること等を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This is a comprehensive, descriptive study of reciprocal expressions in Modern Icelandic, centering on verbs. The following are the main topics dealt with in this study: (1) lexical (inherent) reciprocal verbs, (2) verbs combined with reflexive pronouns, (3) reciprocal verbs with the suffix -st, (4) reciprocal verbs with the prefix sam-, (5) adverbials with reciprocal meaning, and (6) the reciprocal pronoun. The main finding of this study is that whether the reciprocants are expressed by the subject or by the object depends on the construction itself and/or the meaning of the verb.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、アイスランド語、相互構文

1. 研究開始当初の背景

研究開始までの段階において、研究代表者はアイスランド語の-st という接尾辞（再帰代名詞起源）をもつ一連の動詞のうち、相互関係を表す動詞（例：berja-st 「殴りあう、

戦う」, cf. berja 「殴る」）の諸相に関する研究成果を発表していた。そこでは、動詞の表す事態への参加者を分割して表現できるかどうかを基準に動詞を分類し、Hopper and Thompson らが提案した他動性の高低に関わる意味的指標を参考にし、動作様態、アスペ

クト、意図性などの点において検証した結果、参加者を分割して表現することが可能な動詞の方が他動性が高い傾向にあるということ論じ、他動性の高さの指標の一つである参加項の複数性と、相互表現における参加者の分割標示が共通性をもつという指摘をした。

上述の動詞接尾辞-st には生産性がなく、これを任意の動詞につけて相互性を表現することはできないのに対し、アイスランド語で生産的に相互関係を表す手段として、(1) 相互代名詞 *hver annar* ‘each other’ による表現 (例: *berja hvor annan* 「お互いを殴る」)、(2) 接置詞句 *á milli* [+GEN] 「～の間で」による表現 (例: *skipta á milli sín* 「自分たちの間で分け合う」)、(3) *saman* 「一緒に」等の副詞による表現 (例: *tala saman* 「一緒に話す」) があり、また、語彙的に(本来的に) 相互関係を表わす動詞 (例: *keppa* 「競う」) もあり、アイスランド語の相互表現の全体像を把握するには、こうした生産性のある手段による相互表現の特質を解明し、その上で-st 相互動詞の位置づけを考察する必要があった。

そこで、本研究課題は、近年の類型論的な立場から諸言語の相互構文を論じた研究を参照しつつ、アイスランド語における相互表現の包括的な記述的研究をめざすものとして研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究課題では、アイスランド語における相互表現の包括的な記述研究を行なうことを第一の目的とし、特に (1) 相互代名詞、(2) 相互性を表す副詞相当句、(3) 語彙的な相互動詞、に焦点を当て、類型論的立場から行なわれている相互構文の研究を参照しつつ、分析と記述を行なう方針で臨んだ。また、研究代表者のそれまでの研究から、相互表現内部の変異には他動性の高低が密接に関係していることが予想されたため、相互表現における他動性との関わりを解明することも中心的な課題とし、本研究は、アイスランド語という個別言語の記述研究を堅実にこなう一方で、一般言語学的な観点からの相互構文および他動性の理解への貢献を目指した。

3. 研究の方法

研究の遂行においては、アイスランド語のデータ収集に最も時間と労力を費やした。研究に用いるアイスランド語データの収集は、(1) 文学作品や新聞記事などの文献資料からの用例収集と、(2) アイスランド語話者の

協力による現地調査によるデータ収集、の両面で行なった。

文献資料に基づくデータ収集としては主として、文学作品等の一次文献を丹念に読みながらの用例収集と、Web 版の新聞記事から作成したコーパスを利用した用例収集を行なった。

2010 年度と 2012 年度にはアイスランド本国における現地調査をそれぞれ 2 週間程度行ない、母語話者を対象とした言語調査を集中的に実施するとともに、日本で入手することのできない文献の収集に努めた。

一次的なデータの収集と平行して、一般言語学的な研究文献の調査も行ない、用例の分析と文法記述において、先行研究(一般論)の成果を積極的に取り入れるよう努めた。

4. 研究成果

本研究では、ある事態に複数の参加者が想定され、その事態へのそれぞれの参加者の関わり方が対称的であるとみなされる場合を「相互的事態」と定義する。動詞を中心にした相互的事態を表す表現として、アイスランド語では大まかに言って次のものがある：(1) 語彙的相互動詞、(2) 動詞と再帰代名詞による相互表現、(3) 接尾辞-st をもつ相互動詞、(4) 接頭辞 *sam-* をもつ相互動詞、(5) 相互性を表す副詞相当句による表現、(6) 相互代名詞による表現。それぞれについての研究成果の概要を以下に述べる。

(1) 語彙的相互動詞

語彙的相互動詞には、①主語の相互性を表す動詞と、②目的語の相互性を表す動詞がある。

①主語の相互性を表す動詞には、*boxa* 「ボクシングをする」、*deila* 「争う」、*funda* 「会議をする」などがあり、動詞が表す事態への参加者を一つの主語名詞句にまとめた構文と、主語と前置詞句(多くは *við* ACC) に分割した構文が可能である。主語は通常、主格で現れるが、*greina á* 「意見を異にする」のように与格主語をとる相互動詞も存在する。

②目的語の相互性を表す動詞の多くは *saman* 「一緒に」という副詞を伴って現れる(*blanda saman* 「混ぜる」など)が、この副詞を必要としない動詞も存在する(*para* 「つがいにする」など)。

(2) 動詞と再帰代名詞による相互表現

アイスランド語では基本的に、独立の再帰代名詞は *slá sig* 「自分自身を殴る」のように、純粋な再帰の関係を表すのに使用されるが、*gifta sig* 「結婚する」、*para sig* 「つがいになる」、*trúlofa sig* 「婚約する」と

いった、ごく少数の動詞において、独立の再帰代名詞と組み合わせることによって相互関係を表すことができる。

(3) 接尾辞-st をもつ相互動詞

アイスランド語には-st という接尾辞をもつ一連の動詞があり、意味的にはいわゆる中動相の意味領域の広い範囲に広がり、その一部に相互関係を表すものがあり、これを本研究では「ST 相互動詞」と呼ぶ。ST 相互動詞には、①動詞の表す事態への参加者を主語とその相手に分けて表現できるものと、②参加者を一つの主語名詞句にまとめた表現しかできないものがある。

①参加者を主語とその相手に分けて表現できる ST 相互動詞には、前置詞を介して相手を表すもの (berjast 「戦う」、bitast 「噛みつきあう、争う」など) と、前置詞なしで相手を表すもの (giftast 「結婚する」、kynnast 「知り合いになる」など) がある。

②参加者を一つの主語名詞句にまとめた表現しかできない ST 相互動詞には、elskast 「愛しあう」、hatast 「憎みあう」、heilsast 「挨拶しあう」などがある。

参加者を分割した表現のできる①のタイプの動詞は、そうでない②のタイプに比べ、事態をひとまとまりのものとして捉える傾向が強く、派生元と考えられる接辞-st のない動詞と比べて意味が特殊化しているものが多く、動作様態、アスペクト、意図性など、他動性の高低に関わる指標のいくつかにおいて他動性の高さを示す。

(4) 接頭辞 sam- をもつ相互動詞

アイスランド語の接頭辞 sam- は相互性や対称性といった概念を語基の意味に加えることが多いものであり、この接頭辞をもつ動詞について、相互性の関与する要素の統語的機能に注目して検討すると、次のような分類ができる：①主語名詞句の指示対象間での相互性を表すもの、②主語名詞句と目的語名詞句の指示対象間での相互性を表すもの、③目的語名詞句の指示対象間での相互性を表すもの、④その他の相互性を表すもの。以下にそれぞれの特性について概要を述べる。

①主語名詞句 (複数概念) の指示対象間での相互性を表す動詞としては、sameinast 「合併する、統合する」、sammælast 「合意する」などがあり、これらの動詞は②のグループの動詞と同じ構文で主語と目的語の間の相互性を表すこともできる。

②主語名詞句と目的語名詞句の指示対象間での相互性を表す動詞としては、sameinast 「～と合併する」、samfagna 「～に祝辞を述べる」、samlagast 「～に同化する」などがあり、目的語はいずれの動詞でも与格で現れるが、それとともに前置詞句 við

ACC 「～と」で相互関係にある相手を表すこともできる動詞がある (sammælast 「同意する」など)。与格と前置詞句「við ACC」では、含意される対称性の程度が異なり、「við ACC」で表される相手の方が、与格で表される相手よりも主語の指示対象との対称性が高い。①と②の動詞がとる構文における要素間の対称性について、その程度の高い順に序列化すると、およそ次のようになる：

主語 (複数概念の名詞句) の内部 > 主語と前置詞句 við ACC > 主語と与格目的語

③目的語名詞句の指示対象間での相互性を表す動詞としては、sameina 「～を合併する」、samlaga 「～を調和させる」、samtengja 「～をつなぐ」などがあり、すべての動詞で対格目的語をとって、その目的語内部での相互性を表すことができるが、動詞によってはそれに加えて、対格目的語と与格目的語、あるいは対格目的語と前置詞句「við ACC」に分割して相互関係にある対象を示すことができるものがある。この場合、相互関係にある対象の対称性の程度に違いがあり、対称性の高い順におよそ次のような序列化を行なうことができる：

目的語 (複数概念の名詞句) の内部 > 目的語と前置詞句 við ACC > 対格目的語と与格目的語

④その他の相互性を表す動詞としては、samræma 「(規則などを) 標準化する」など、その動詞を含む節内の要素間の相互性を表すとは考えられないものや、samkjafta 「口を閉じる、黙る」(cf. kjaft- 「顎、口」) のように、動詞を構成する成分の相互性を表すものがある。

(5) 相互性を表す副詞相当句による表現

相互性を表す副詞相当句として頻度の高いものとして、①副詞 saman 「一緒に」、②再帰代名詞と複合接置詞の組み合わせ sín á milli 「自分たちの間で」、③副詞相当句 á mis 「すれ違って」がある。これらは多くの動詞と比較的自由に結びつき、節内の要素の相互性を表すことができる。

①副詞 saman 「一緒に」と結びついて主語の相互性を表す動詞には、fara saman 「一緒に行く」、renna saman 「合流する」、ræða saman 「話し合う」、safnast saman 「集まる」などがある。この中には与格主語をとる lenda saman 「衝突する、乱闘する」という動詞もある。目的語の相互性を表す動詞には、bera saman 「比べる」、binda saman 「結び合わせる」、rugla saman 「混同する」、tína saman 「収集する」などがある。主語の相互性を表す動詞でも、目的語の相互性を表す動

詞でも、相互関係にある要素を分割し、相手を前置詞句 við ACC で表せるものがある。

②属格支配の複合接置詞 á milli「～の間で」と代名詞が結びついて(例: okkar á milli「私たちの間で」など)、相互性をかなり生産的に表すことができる。代名詞と á milli の語順は「代名詞 á milli」と「á milli 代名詞」の両方があり、前者の方が頻度が高い。これと結びついて相互性を表す動詞表現には、deila sín á milli「互いに争う」、spjalla sín á milli「互いにおしゃべりする」、kasta boltanum sín á milli「互いにボールを投げあう」などがあり、こうした表現では主語の相互性を表現することしかできない。

③副詞相当句 á mis「すれ違って」は、例えば farast「行ってしまう」という動詞と結びついて「行き違いになる」という意味を表し、複数概念の主語の相互性を表す。相互関係にある参加者を主語とその他の要素に分割して表示することはできない。

(6) 相互代名詞による表現

相互代名詞は、アイスランド語で相互関係を表す最も生産的な手段である。相互代名詞は第一要素の hver ‘each’ と第二要素の annar ‘other’ という二つの要素から成り、動詞の目的語として現れるほか、前置詞、形容詞などと結びつき、同一節内の主語を先行詞として照応関係を示して現れる。

動詞の目的語としては、①対格目的語の位置(例: berja hvor annan「互いに殴りあう」、aðstoða hvor annan「互いに支持しあう」など)、②与格目的語の位置(例: kynnast hver öðrum「互いに知りあう」、þakka hver öðrum「互いに感謝しあう」など)、③属格目的語の位置(例: gæta hvers annars「互いに気遣いあう」など)に現れる。

前置詞の目的語としては、①対格支配の前置詞との結びつき(例: hver við annan「お互い同士で」など)、②与格支配の前置詞との結びつき(例: hver af öðrum「お互いから」など)、③属格支配の前置詞との結びつき(例: hver til annars「お互いに向かって」など)で現れる。

なお、属格の相互代名詞は、他の名詞を修飾する成分として最も頻繁に用いられる(例: tungumál hvers annars「お互いの言語」など)。

また、相互代名詞は形容詞や副詞の補足語として現れることもある(例: ólík hverju öðru「互いに似ていない」など)。

相互代名詞の第一要素と第二要素の形態的な現れ方は非常に複雑であり、主語の性(男性・女性・中性)、主語の数(主語が二者か三者以上か)、主語が複数の成員を含むグループか否か、といった要因に加え、第一要素と第二要素が異なる格形で現れる場合

と、同一の格形で現れる場合とがある(本研究では前者を「分離型」、後者を「一体型」と呼ぶ)。

ここで格形に限定して例示するならば、例えば、対格目的語をとる動詞 berja「殴る」と結びつく場合、分離型では berja hvor annan ‘beat each:NOM other:ACC’、一体型では berja hvorn annan ‘beat each:ACC other:ACC’ となる。対格支配の前置詞 við「～と、～に対して」と結びつく場合、分離型では hvor við annan ‘each:NOM with other:ACC’、一体型では við hvorn annan ‘with each:ACC other:ACC’ となる。

分離型と一体型で異なるのは、先行詞と第一要素の一致に関わる文法範疇であり、第一要素の数と格の点で形態の変異が見られる。また、分離型は規範的・書き言葉的であるのに対し、一体型は口語的であるという文体的な違いがある。

新聞記事のコーパスを利用した調査では予想通り分離型の出現頻度が高いが、一体型も出現しており、意味の面で、分離型よりも一体型をとっている動詞の方が他動性の程度が高い傾向にあると考えられる。

以上、本研究課題の成果の概要を述べた。本研究は次の点で意義があると考えられる：

- (1) アイスランド語の相互表現の範囲をほぼ確定した。
- (2) 動詞表現を中心に、相互関係を表現するさまざまな手段と、それぞれが結びつく動詞の諸相についての記述を丁寧に行なった。特に、主語の相互性を表すのか目的語の相互性を表すのか(あるいはその両方を表すのか)という点で、また、相互関係にある要素を一つの名詞句で表現することしかできないのか、それとも前置詞句などで分割して表すことができるかという点で、相互関係を表す手段による相違や、同じ手段であっても動詞による相違があることを明らかにした。
- (3) 形態的に複雑な現れ方をする相互代名詞の出現の実態を、ある程度整理して示すことができた。

一方、研究開始当初の目標の一つとしていた、互表現内部の変異と他動性の関わりを解明することは、部分的にしか行うことができず、今後さらに追究すべき課題として残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 入江浩司，現代アイスランド語の接頭辞 sam- と相互性，金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇 5，2013，17-30，査読無.
- ② 入江浩司，現代アイスランド語の相互表現の概要，金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇 4，2012，1-22，査読無.
- ③ 入江浩司，現代アイスランド語の相互代名詞，金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇 3，2011，25-46，査読無.

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 入江浩司，アイスランド語における逆使役，日本言語学会第 145 回大会，2012 年 11 月 25 日，九州大学（福岡県）
- ② 入江浩司，現代アイスランド語の相互構文における参加者の現れ方，第 4 回動詞項構造研究会，2011 年 3 月 13 日，名古屋大学（愛知県）

〔その他〕

ホームページ等

金沢大学学術情報リポジトリ KURA

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入江 浩司 (IRIE KOJI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40313621

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし